
ねとられ婚約者

秋生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねとられ婚約者

【Nコード】

N0229Y

【作者名】

秋生

【あらすじ】

巫女様が我が国にやってきて半年。

散々ボロクソに彼女をこき下ろしていた宰相様こと私の婚約者様が、先日とうとう陥落なさいました——と、言う噂。

※底辺クオリティでただただ更新中です。

01話　とうとうこの日がやってきました（前書き）

暇つぶしに流し読む感じで宜しくお願い致します。

※11／3　少し修正しました。

01話　とうとうこの日がやってきました

我が国に、　所謂“巫女様”と呼ばれる異界の少女がやってきて半年。

その半年の間に、この世界の勢力図はガラッと変わった。

こちらにやって来たばかりの頃の巫女様は慣れない環境に戸惑うばかりの様でしたが、持ち前の前向きさと溢れんばかりの魔力、魔力で次第に周りと打ち解け始め。

——仲間を引き連れ見事に『魔王から世界を救う』という偉業を達成されました。

ところがどっこい。

いつの間にか味方側だけではなく、敵であるはずの魔王までも魅了した我らが巫女様の勢いは衰えを知らず。

当初から巫女巫女ウゼエと宣っていた性悪宰相様こと私の婚約者様も、先日とうとう陥落なされました——と、言う噂。

直接本人に確認した訳ではありませんでしたが、ほぼ毎日来ていた昼時のランチにもぼったり顔を見せなくなり。

ついでに噂の内容が日々具体的となり真実味を帯びていくという状況は、否が応にもそれらが事実であると認めざる終えなくなるには十分でした。

——つまり私は、巫女様に婚約者を寝取られた哀れな女という訳です。

：まあ、そもそもこれまでが可笑しかったのです。

私と宰相様——ジークフリート様は所謂、幼馴染みというヤツで。婚姻についても親同士が勝手に決めたようなものでしたので、特にらぶらぶな展開も一切なく。

——途中、我が家がまさかの没落という緊急事態に見舞われましたが——苛めっ子とスルーっ子の図式がズルズルと続いていた訳です。

そもそも普通ならウチが没落した時点で婚約破棄ですよ。うん。
——という訳で、街の酒場の女店主は、目の前でいつもの調子でオムレツを召し上がられている宰相様から、本日とうとう婚約破棄を
通達されたのでした。

「……婚約を白紙に戻したい。」

「はあ、人が作ったもん食いながらする話でもないですけど。分かりました。」

ざわっ

静まり返っていた店内——いつもはやかましい位に騒がしいんです
が——に一瞬、動揺が走る。

「オイオイ、シャロンちゃんあっさり快諾しちゃったぞ」

「つつうか、あの噂本モンだったんだな」

「ア、ーッ馬鹿ジークの野郎、オレの100ガネット返せええええ」

「外野うるさい。賭け事は程々についていつもいつてるじゃないですか。」

「「「サーッセーン」」」

ピシヤリと、テーブル席からカウンターにいる私達を見てコソコソ

と噂する常連さんを窘める。

本来、客が店内で何をしようと自由なのが一般的な酒場のスタンスですが、ここは私の店なので言いたい事は言わせてもらってます。……何故だか、それが評判らしいというのが解せませんが。

いつもの如く反省の色が見えない常連さんの態度に溜め息を吐きながら、私は再びカウンターに座る宰相様に顔を向けました。

「本題に戻っていいか？——水。」

「あ、はい。お待たせしました。——ちょっとまって下さい。」

そうして、私はカウンター越しに差し出されたコップにいつものレモン水を注ぎながら、淡々と今後の事務的な話をする宰相様の声を聞いていた。

ねえ、宰相様。貴方はいつも唯我独尊かつマイペースで、他人も婚約者もボロクソに仰る方でしたが、昔から変な所で律儀な方でしたね。

“好きな奴が出来た。婚約は破棄にする。”

……こんな城下町にある小さな酒場の女店主なんて、それだけ言っただけでバツサリ切ってしまったても可笑しくないのに。

——悲しさよりも何故か嬉しさが勝って、私は思わずふにやりと笑ってしまいました。

それを見た宰相様が、眉を寄せかなり複雑な表情になられたとか、その後方にいる常連さんが私達の微妙な雰囲気にもまた何かを企てていただとかは——その時の私はまだ、気付いていませんでした。

01話　とうとうこの日がやってきました（後書き）

らぶはないですが大人の階段は昇っている設定です。（お前）

02話 せいぜい楽しませて下さい(前書き)

今回は酒場の常連さん視点です。

※評価・お気に入りありがとうございます！

※01話、若干加筆しています。(10/29 21時頃)

02話　せいぜい楽しませて下さい

《世界を救った巫女様争奪戦線についてあの冷徹非道な宰相・ジークフリートが参戦！更に泥沼化した王宮恋愛事情、果たして今後の展開は如何に――》

なんて言うふざけた噂が流れ出だした数日後、噂のジークフリート様ご本人が婚約者のはずのシャロンの店――《酒場・オータムボーン》に現れた。

まあ酒場と言っても、実際は何だかんだで真面目でお上品な店主様のお人柄と、酒場に不似合いな家庭料理のお陰でかなりアットホームな店なんだがな。

――と、話が逸れちゃったが。そう、そのジークがシャロンの前に現れた。

で、いつものカウンター席に座り、いつも通りオムレツを注文し（因みに今は昼時だ。そして俺達が酒を呑んでいるのは夜勤上がりだからだ。断じてサボっている訳じゃない。）出来上がったオムレツを二、三口に入れた後に白紙云々のアレだ。

お前、せめて口にあるモン片してから喋ろよ――なんて呑気に二人を眺めていたら、段々雲行きが怪しくなってきた。

「…なあ、あの二人何か様子が変わじゃねえか？」

ポツリと呟いた一言に、隣のテーブルで賭がどうたらと喚いていた常連仲間どもが反応した。

「……………ん？」

「……………おお？」

「……………なあ、キース。ジークの奴もしかして…」

一斉にカウンターの様子を確認した三人。

此方からはシャロンの表情とジークの後ろ姿しか見えなかったが、伊達に長年此处に通っていただけにその違和感に直ぐに気付いた様だ。

「…何か理由アリみてえだな」

ニヤリと、まるで新しい玩具でも見つかった様に真後ろのロツジが呟く。

《酒場・オータムボーン》でシャロンが働く様になってそろそろ十年。

その間、明らかに慣れない仕事に戸惑うシャロンに罵詈雑言を浴びせながらもサポートしたり、場所が場所なだけに無遠慮にシャロンに言い寄ってくる野郎どもを陰ながら排除したり、させたりしていたのがあのジーク坊ちゃんだ。

件の巫女様は噂を聞く限り、民間人の俺達がドン引きたくなる程に魅力的だそうだが——それでもあのジークが堕ちる事がまず考えられないのだ。

…まあ、だからと言って俺達が“あの二人の為に”動く事はないんだが。

「せいぜい100ガネットの恨みを思い知るがいい…ククッ」

隣で凶悪な笑みを浮かべるアーノルドを見やり、同じく俺も口角が上がった。

——俺達はただの客だ。

だが、あの二人の抱腹絶倒な茶番劇の観客かつエキストラでもある。

「よっしゃ、今回も盛り上げてこうぜ！」

こうして今日も、年若い男女二人は中年オッサン共の格好の酒の肴にされるのであった——。

02話　せいぜい楽しませて下さい（後書き）

オッサン達、完全に状況を楽しんでいます。

毎回この調子でジークに絞められたりもしていますが、全然全く懲りる気はありません（笑）

03話 そろそろ我慢の限界です（前書き）

ラスボス登場編。ジーク視点です。

※お気に入りありがとうございます…！

03話 そろそろ我慢の限界です

カランカラン

酒場にしちや少し洒落た音が店内に響く。：もう来やがったか。

胡乱な表情で入り口を見やれば、そこには予想通り魔女——いや、“巫女様”が突っ立っていた。

「もう！ジークさん、こんな所で油売ってたんですか！部下さん達が捜してますよっ。」

ウゼエ。

大体、“こんな所”たア聞き捨てならねえし、部下にしたって事前にきちんと調整してんだから困る筈がないんだよ分かったかクソガキ——などと正直な気持ちをぶちまけたい所だが、後々が面倒なので本音と建て前をすり替える。

「…ああ、それはすみません。」

「んもう…今まで何してたんですかッ!？」

お前は牛か。

——魔女の言動一つ一つが目障りで潰したい衝動に駆られながらも、自制する。

「もー、聞いてるんですかッ!?!ジークさん!」

ああウザイ、まじウザイ。

今まで何をしてたか?——んなもん見りゃ分かるだろう。

「…昼食を取っていただけです。」
チラリと、魔女に気付かれない様に動揺しているシャロンを見た後に、そう答えた。

「いつもいないと思ったら…城内にも食堂はあるのに、わざわざ城下町まで出てくるんですか？」

「城のメニューは味が合いませんので。」

——城にはシャロンも居ないしな。

心の中でそう付け加えながら、俺は掬っていたオムレツを口に入れる。…クソ、クソガキの所為で冷めちまったじゃねーか。

「温めましょうか？」

「…頼む。」

思わず顔をしかめた俺に気付いたシャロンが気を効かす。

素直に頷いた俺からオムレツのプレートを受け取り、シャロンは小声で呪文を唱える。

「…火の魔法？」

「え？あ、はい…。」

しまった———そう思った時にはもう遅い。

それまで存在すら認識していなかったであろうシャロンに、魔女が興味を持ってしまったのだった。

03話 そろそろ我慢の限界です（後書き）

ジークさんは結構大人気ない残念な人です。

04話 だんだん状況が見えてきました（前書き）

うおお、お気に入りに評価に感想までありがとうございます…！
ご期待に添えられるかは分かりませんが、精一杯頑張らせて頂きます……！

今回はシャロンちゃん少々しょっぱい展開です。

04話　だんだん状況が見えてきました

婚約破棄の事務手続きの話をしていた最中に突然現れた“巫女様”。

初めはまさかの展開に、若干呆けてしまいましたが——お二人の様子を見て、何となく状況が見えてきました。

「オイ、ジークの奴ブチギレ寸前じゃねえか」

「表面上にこやかな分、邪悪オーラの迫力まじ半端ねェ」

「それに気付いてねェとか、あの嬢ちゃんが本当に世界を救った巫女様なのか？」

外野、お黙りなさい。

例え本人が眼前でデメェ潰すぞオーラ全開な宰相様にしか意識が向いていないからって、お客様への誹謗中傷は私が許さん。

——という視線をテーブル席の方へ向けると、常連さん方は片手を挙げ軽いノリで謝罪をしてきました。：ですが、顔面がニヤケて崩壊しているという。

皆さん、完全に楽しんでらっしゃいますね…。

かく言う私は状況は見たものの、どう動くべきか決めあぐねていました。

あの一等級に自尊心のお高い宰相様が、正直空気が読めていらっしやらないこの巫女様に陥落したという噂が国中に出回っているという事実。

どうやらただ事ではない何かが起こっているのは間違いありませんが、如何せん私はつい先程婚約“白紙”を言い渡された身。

——つまり、宰相様は暫く自分に関わるなという事を伝えに来たのではないか——とは思いますが、ついでに惰性で続いていた没落女との関係を断ち切ろうとなさっている可能性も捨てがたく。どうしたものかと、ふと宰相様を見やると何とも言い難い複雑な表情をされていて。

：ああ、オムレツが冷めて美味しくないけど、巫女様には猫を被っている手前、顔をしかめられない——という所でしょうか。

「温めましょうか？」

「……頼む。」

こういう事なら簡単に解るんだけどな——と思いながら、オムレツを温める呪文を唱えていると、宰相様の隣に立たれていた巫女様が息を呑む音が微かに聞こえました。

「…火の魔法？」

「え？あ、はい…。」

：しまった、思いも寄らぬ所で巫女様に認知されてしまいました。手前に座る宰相様も、思わずといった感じで顔をしかめています。：恐らく彼女と関わる事が最もタブーと思われる中で、目立つ様な真似をしでかしてしまった私は——それでも何とか切り抜けようと話を逸らす事にしました。

「お客様も何かご注文は御座いますか？」

「…えっ、あっ……ええと、お弁当があるから大丈夫ですっ」

：よし、逸れた。

思わずカウンターの下でガッツポーズ。

後ろの方で常連さん達もエア拍手で褒めて下さっています、が。

「すみません、お腹空いちゃって…此方で食べちゃっても良いですか？」

そう言っ、あろう事か飲食店で巫女様は恥じらいつつも非常識な提案をなさいました。

…えっ、あの、いやもしかして巫女様の世界ではこれが常識なのでしょうか——などと私が今度こそ思考停止に陥ったその時、口を開いたのはいつの間にかオムレツのプレートを空にした宰相様でした。

「マドカ様、此処は酒場です。飲食店で持参の弁当を広げるのは非常識です。」

「……あつ、……………」
「めんなさい……………」

『…』が多い。

…と、思わず宰相様のなツツコミを入れてしまいそうになりましたが、いやいや、今はそれよりも目の前の巫女様です。

どうやらこの方、精神的にまだまだ幼くいらっしゃる様ですね。良く言えば純真無垢なのかもしれませんが、うっかり余所の酒場で似た様な話をした日には女だろうが容赦なく締められます。子供だからで済まされるのは10歳までですからね、この国は。

あ、でも巫女様ですから、何とかバリアーとかいうので護られるから大丈夫なのでしょう。まあ、どうでも良い話ですね。

そんな事をぼんやりと考えながら傍観していると、ポツリポツリと

巫女様が話し出しました。

「……そうですね…折角エリクさんに手伝ってもらって、一生懸命作ったので、ジークさんにも、と思って持ってきたんですけど…、そうですね。迷惑、ですよね…：…本当にごめんなさい！」

と、巫女様。宰相様に向かって最敬礼で謝罪。

「オイオイ、ガチでジークしか見えねーぜあの嬢ちゃん。」

「思った以上に盲進的だな。」

「しかし、エリクと言えばあの魔道騎士のエリクサマか？さり気なく男の名前出すなんざ、なかなかやるな。」

「しかも無自覚くせえし、ありゃジークも相当振り回されてんな。」

「ひえー修羅場修羅場。」

ざわざわと、巫女様が来店なさる前とは打って変わって騒がしくなる店内。

：ギャラリーが増えているのは気のせいではないですね。

宰相様には申し訳ありませんでしたが、さり気なく修羅場なお二人から離れお客様の対応をしていると——突然、後方からドッと歓声が沸き上がりました。

何事かと振り返れば、そこには——無表情に淡々と巫女様のお弁当を召し上がる宰相様と、嬉しさのあまり泣き出しそうな巫女様のお姿がありました。

………勝手ではありますが、今日の夜の営業はお休みさせて頂く事に、しました。

04話 だんだん状況が見えてきました（後書き）

婚約破棄か…↓ん？破棄ではなく白紙と言う事は…？↓ジークさん
ナニシテンスカ、（＾p＾）

と言う事で、巫女様ガチで寝取りにきたぜ！二段階ダメージは地味
にキツイぜ！…な巻でした。

ジークさんまじナニヤツテテンスカ／（＾o＾）＼

05話 勝手に落ち込まないで下さい（前書き）

言い訳タイムその1

※お気に入り・評価・感想ありがとうございます！
感想への返信は夜あたりに出来ればと思います。

05話 勝手に落ち込まないで下さい

巷で噂の巫女様が《酒場・オータムボーン》に現れたらしい——
そんな噂を聞きつけて、今日のオータムボーンはいつも以上に盛況
でした。

普段は昼過ぎには一度店を閉めるのですが、今日は一向に客足が途
切れる気配ががなく、結局収穫祭の日と同じ勢いで夕方近くまで営
業してしまいました。

…夜の営業を休みにして正確だったな。

「……ふう、」

わいわいがやがや、夕日が差し込む窓の向こう側から、帰路に就く
労働者達の話し声や荷車の音が聞こえてきます。

私は一つ、小さな息を吐くと、ぐいっと背筋を伸ばしました。

「んー…今日は働いたなー。」仕事が一段落した後の、この何とも
言えない気怠さが好きです。

今日は綺麗な夕日を見ながらだから、なお充実感があります。

十年前、母を亡くした直後から賭博に父が浸ってしまい、膨大に膨
れ上がった借金を返済するべく爵位も屋敷も領地も全てを売り払い、
この店で再スタートをきって。

初めは前店主の見習いで、慣れない仕事に戸惑いながら日々を過ご
していましたが——前店主を始め、今より少し荒くれ気味だった常
連さん方や更正した父、宰相様達に叱咤激励されながら何とかここ
までやってきました。

二年前、父と前店主が再婚を機に諸外国へ周遊しに旅立つ事になり

私がいきなり店主に抜擢された日には、『無理だミジンコレベルの
コイツにはまだ早い』と宰相様に散々ダメ出しを頂く事もありまし
たが。

それでも何とか踏ん張って、ようやく最近『自分の店』と言う自覚
が持てる様になりました。

「独り立ちの準備が出来たって事なのかな…。」

今は私以外誰もいない店のカウンター席から、ぼんやりと夕日を眺
めながらポツリと呟く。

そう。私も今年で27です。

何も知らない元貴族のお嬢さんな時期はどうに過ぎていきます。

何時までも宰相様や常連さん達の好意に甘えていては駄目なのです。

「これからは積極的に店を宣伝して…あ、他店との差別化も大事だ
な…：それから…」

ポツリポツリとこれからの事を考えたままに呟きいて、ノートに記
す。

今は余計な事を考えなくなかった分熱中しすぎて、日が暮れる頃
にはカウンターのうえでうつ伏せになり意識を手放していました。

「……い、……おい…」

「……………ん…？」

ふと、誰かに呼ばれた気がして顔を上げる、と。

「やっと起きたか粗忽者。」

「！」

すっかり夜になり暗い店内で唯一、ゆらゆらと光るランプに照らされながら、相変わらぬ無愛想顔で宰相様が此方を見ていらっしゃいました。

：カウンター越しに、先程までの私と向き合う形で顔を横にしていたらしく、思いのほか至近距離な事に驚いた私は先程よりも更に勢い良く仰け反りました。

「う、わ」

「あつ、バカ…」

ガッタン！と、椅子が倒れる音が店内に響きます。

私はというと、何とか近くのテーブルに掴まり負傷を免れる事が出来ました。

「……はあ、相変わらずドジだな。」

「…不可抗力です…。」

間近で久々に宰相様のその整ったお顔を拝見して、心拍数を上げるなどというのが難しいです。

「その椅子、俺の特等席なんだから丁重に扱えよな。」

「はい…。」

そう応えつつ、倒してしまった椅子を元に戻して、再び座ります。その頃には宰相様も身体を起こして、店主用の縦長椅子に姿勢正しく座っていらっしゃいました。

「ふふ、何だかいつもと立場が逆転してますね。」

「そうだな。」

「…………。」

暫しの沈黙。

：それを破ったのは宰相様でした。

「悪かったな。」

「？」

「…今日、あの後。店、すげえ大変だったって聞いた。」

「……ああ、大丈夫です。もともと夜はお休みさせて頂く予定だったので、良い口実になりました。」

そう軽い調子で答えながら、ふにやりと笑顔を作ってみせると、宰相様の無愛想顔が心配顔に切り替わりました。

「……そうなのか？」

「はい。流石に噂の片鱗を見せ付けられた日くらいは、私だって落ち込みます。」

「誤解だ。」

ダン！…と、力強くカウンターを叩きながら、宰相様が真っ直ぐ私に視線をぶつける。

突然の変調に驚いた私にすまん、と小さく謝った後、ぶつぶつとこう付け足されました。

「……いや、そう見せている部分は確かにあるが、好きでやってる訳じゃない。」

「ですが、口付けなされたと言う噂を聞きました。」

「あのガキがすっ転んだ拍子に、俺の頬に口が付いただけだ。」

「……一晩、共に明かされたと。」

「第三王子お手製の城の防犯用トラップとかいう訳の分からん装置に、巻沿いくらって閉じ込められていただけだ。因みに、今日の件については後で話す。……他にはどんな噂が？」

「いえ、もう結構です。」

「…じゃあもう怒る理由もないだろ。その宰相様呼びも止めろ。…今回は本当に、悪かった。」

「はい、ジーク様。」

そうして、私は呼称を元に戻しました。

——本当は酒場に流れてきた噂は他にもまだまだ沢山ありましたが、

これだけ説明して頂ければ他も大体似た様なものと言う事くらいは想像つきます。

昼間の件で実はやはり——と、噂を信じてしまいそうになりましたが、何やら事情があるという読みは外れていなかったみたいです。

「次は俺の番だな。」

呼称が戻った事で若干機嫌が治ったのか、ジーク様は先程よりも幾分落ち着いた様子で、今日に至までの経緯をお話し始めました——。

05話 勝手に落ち込まないで下さい（後書き）

ジークさんはシャロンさんから宰相様呼びされるのが嫌いです。
ささやかな嫌がらせ大成功といった感じなシャロンさんでした。

次回はジークさんのターンです。

06話 勝手に抱え込まないで下さい（前書き）

言い訳タイムその2

※いつの間にかお気に入りか1300件を越えている…だと…？
※本当に皆様ありがとうございます！

06話 勝手に抱え込まないで下さい

まずは話を整理しよう。

この国で現在、巫女様と呼ばれる少女は一人だ。名はマドカ。歳は17。異界人だ。

——これはごく限られた人間しか知らない事実だが、彼女自身には何ら特殊な能力はない。

「え、でもよく噂で聞きますよ？ 巫女様は…ええと、『加護の力』で護られているから、攻撃魔法を受けても傷一つ付かないとか…。」

「巫女は24時間体制で魔道師団から遠隔で護られていただけだ。」
「では、『浄化の光』？ で一瞬にして魔獣を跡形もなく消し去る話は…。」

「巫女一行にいた魔道騎士が、あたかも巫女がやったかの様に見せかけたただけだ。」

「……………」

——何故、その様な面倒な事を？

珍しく顔をしかめ、そう尋ねたシャロンに対し俺は先程までよりも更に声を潜め、問いに答えた。

「彼女が、この国の贄となる為に喚ばれたからだ。」

そう、数十年に一度、異界から習慣的に喚ばれる巫女という存在。

それは、周期的に現れては魔獣を従え各国の領土侵略を行う様になる、“魔王”と呼ばれる後天的異能者を抹殺する為に呼ばれていた。——“後天的”と何故判るのかだって？

それは簡単だ。…過去に“魔王”と呼ばれた者達の身元は、その大

半がこの大陸の何れかの国に住む、ごく普通の国民だったのだ。

『“魔王”となる者は、誰もある日突然覚醒する。そして“魔王”は覚醒する際、力が暴発するのかわず大きな爆発が起こる。――それが、“魔王誕生”のサインだ。』

俺が宰相となった最初の夜、その話をしてくれたのは知識王と呼ばれていたこの国の前国王・フレデリックだった。

フレデリックは更に、この大陸に存在する、国のトップレベルでしか知らされていない暗黙のルールについても教えてくれた。

「“魔王”は“魔王を魔王たらしめんとした国”が排除する。」

「……え？」

“魔王”ってのは、何かしら国に対して不満を持った人間がそうなるんだよ。」

――つまり、自国民の責任は自分達で取れと言う事。

「……ああ、だから過去の討伐も毎回参加する国が異なっていたのですね。」

「金かかるしな。」

で、巫女様だ。

先程も言ったが、巫女は魔王抹殺の為の駒でしかない。

「何故、異界から喚ぶ必要があるのですか？」

「そこなんだが。」

まず過去の魔王討伐で分かった事だが、魔王は自らとその周囲――王座から謁見者を見下ろすまでの距離――に対して、結界を張ることが非常に多い。

「様々な手を尽くしたが、結構この世界の人間では結界を破る事は出来なかった。」

「……でも、異界の人間は違った？」

「その通りだ。」

細かい経緯は省くが、とにかく異界人ならば結界の先へ辿り着ける事が分かった。

となれば、そう。

後はその異界人を介して、魔王を抹殺するだけだ。

——巫女と言うのは、元々はその為だけに喚ばれた存在だったのだ。

「……。」

シャロンの表情が曇る。

それを俺はあえて無視して、話を続ける。

「…と、いつもならそれだけで終わる筈だったんだが、今回はこれまでと様子が違う。」

まず、第一に魔王が生きている。…正気は取り戻しているみたいだが、こうした例は過去に一度もなかった。

次に、巫女が生きている事。これも、珍しいケースだ。

最後は周囲の人間の態度。——これが一番厄介だった。

「魔王討伐に向かう時、周囲の人間は巫女に対してどういった接し方をすると思う?」

「……駒だという事に気付かれない様に…能力の件も伏せて、持ち上げる?」

「そうだ。今回も例に漏れず、出発前はそんな感じだった。」

だがしかし、戻ってきたらどうだ。

巫女に同行したメンバーは勿論の事、何故かついて来た魔王も、戻

ってきってから巫女と話した野郎どもまでもが——色ボケして全く使い物にならなくなっていた。

「国民の税で食わせてもらってるのに、事ある毎に巫女様巫女様……ああウザイ。仕事しろ花見なんて休日にしる働け馬鹿野郎ども。」

思い出したらまた殺意が沸いてきた。

「仕事に支障が出るレベル……それは、凄まじいですね。」

「ああ、だがそれだけじゃない。：奴ら、巫女にかまけてばかりで、元いた恋人や婚約者にゃフォロなんて事一切してなかったんだよ。」

「それは：修羅場の香りが：。」

「全て俺と俺の部下が対処した。：既婚者への影響が少なかったのが、せめてもの救いだな。」

当時の事を思うと、自然と目が遠くなった。

——あの頃の俺は、シャロンのオムレツがなかったら、気が狂って何をやらかしていたか分からない。

「……ですが、ジーク様方は平気だったんですか？：その、例の噂の様に、巫女様の魅力に陥落されたりは。」

「俺は見ての通り、堕ちてなんかねえが——ウチも最近被害が出た。：多分、巫女様が俺に目を付けて執務室に入り浸る様になったからだろうな。」

「……。」

——ピクリと、『入り浸る』と言う単語にシャロンが一瞬反応したが、念押しするのは却って信じてくれているシャロンを疑う様な気がしたため、自重する。

「大体の事情と状況は分かりました。：ですが、これでは逆に、ジーク様が巫女様に堕ちていないのが不思議です。——何か、特殊な力が働いているのではないですか？」

「察しが良いな。」

「魔道騎士エリク様の婚約者様とは、今も交流がありますから。——よくよく考えれば、エリク様も突然婚約者と音信不通となる様な不誠実な方ではありませんでしたね。」

……成程、そう言えばあのエリクの婚約者とシャロンは親友同士だったな。未だに交流があると言う事は、それこそ本物なのだろう。あちらの二人も中々事情は複雑そうだが——他の婚約者達が今とは別の縁談を検討し始める中、エリクが元に戻るまで待つと言いきった彼女については、俺も驚いたものだった。

「：エリク達は今、呪詛にかかっている。——いや、正確には、呪詛にかかった巫女様にあてられている、と言った所か。」

「呪詛、ですか……あ、ひょっとして、ジーク様に影響が出なかったのは。」

「そう。恐らくコイツのお陰だ。」

コロンと、手の平に余裕で収まるそれをカウンターの上に転がす。

——それは、シャロンの父が異国で見つけたと言う、呪詛除けの御守りだった。

「：父のお土産も、偶には役に立つのですね。」

真顔でそう言うシャロンに思わず吹き出しそうになったが、何とか持ちこたえて話を続ける。

「ああ、コイツのお陰で、ひとまず国全体が機能しなくなる事は免れた訳だ。：こないだ、お前の連絡鳥借りただろ。あれでダインのおっさんにコイツの詳細を聞いている所だ。」

「……そうだったのですか。……。」

そうして、シャロンが黙り込む。

右手を顎に当てるのは、彼女が考え事をする時のクセだ。

「現状、その御守り以外に打つ手は無いのですか？」

「いや、幾つか手は打ってある。…まあ、その中の一つが、昼間の――俺が巫女の気を引き付けておく策だったんだが。……本当に悪かったな。」

「その件については、もう気にしていません。」きっぱりと言い切るシャロンの様子を窺う。…確かに、先程ほど思い詰めた雰囲気はなかった。

「…出来れば、私もジーク様のお力になりたいのですが……そもそも、この様な重要な話を一般人の私に話されて大丈夫なのでしょうか？」

と、伺うような視線でシャロンが尋ねる。

俺はカウンターに乗せられている彼女の左手に、自分の右手をそつと重ねた。

「正直な話、この件に関してはシャロンに関わって欲しくない。」だから初めは事情も話さず突き放そうとした。

――まあ、事態が尚更ややこしくなるだけだと思い返し（シャロンは控え目に見えてかなり行動的だ。勝手に動かれる方が怖い。）、早々に切り替えてしまった訳が。

「俺としては偶に、こうして話を聞いてくれるだけでも十分助かっているんだが――お前はそれじゃあ満足出来ないんだろ？」

「はい。だってジーク様、何でも一人で抱え込んでしまうんですもの。そんなの、私は嫌です。…お願いします、力にならせて下さい。」

そうして、俺の右手にシャロンの右手が重なる。…温かい。

「ああ。すまないが、宜しく頼む。」

「はい。」

そうして、シャロンは優しく微笑んだ。

：彼女の両手とその気持ちが温かく、ここ最近張り詰めていたものが解れていくのが分かる。

——やはり、俺はシャロンじゃなきゃ駄目だ。

「因みに、お前はこんな話を聞いて良かったのか気にしているみたいだが——まあ、いずれ結婚するんだ。問題ないだろ。」

「婚約は白紙にするのではなかったのですか？」

「馬鹿、それはあくまで今回の件を解決する為だろ。俺はお前しか要らん。」

きっぱり言い切ると、シャロンは一瞬目を見開いて、先程よりも更に笑顔を綻ばせながらこう言った。

「私もジーク様じゃなきゃ嫌みたいです。好きです、ジーク様。」
「——」

ゴン！

……あまりの事態に俺は動揺して、思わずカウンターの後ろにある調理棚で頭部を打った。

正直に言おう。

幼馴染み23年、婚約者を15年やって来た俺達だったが、互いの気持ちをハッキリと伝えた事は今まで一度たりとも無かった。

（流れて、そう言う行為に及ぶ事はまあ、そこそこあったが。）

明らかに挙動不審な俺に驚いていたシャロンが、はっと気付いた様に伺う。

「ジーク様、大丈夫ですか？」

「……あ、ああ。」

明日から本当、頑張ろう——心の底からそう思った、その時。

「」「ヨォーッスお二人さん！乳くり合ってっかーッ！？」」「」

「……………」

タイミングを見計らったかの如く、
煩い連中が店内に入り込んで来
やがった――。

06話 勝手に抱え込まないで下さい（後書き）

俺達の戦いはこれからだ！…と言う事で、本当は此処で終了する予定でしたが、もう少し頑張ってみる事にしました。

今しばらくお付き合い頂けると嬉しいです。

07話 執務室とジークと俺と（前書き）

秋生大好きオッサンのターンです。

語り口調が強いので、苦手な方はお気を付け下さい。

※お気に入り1600件オーバーありがとうございます…！

07話 執務室とジークと俺と

「ヨォーツス、喚ばれて飛び出た傭兵キースちゃんであーす。……なア、ジーク。この部屋異様にムサくないか？」

28と言う年齢にしては、宰相と言うご立派な役職を持つちんちくりん坊ちゃんの執務室を見た俺の第一声。

そんな、折角面倒くせえ手続きまでして来てやったオッサンに対し、奥の席で執務をこなす部屋の主は、此方に一切目もくれずに淡々と答える。

「当たり前だろ。既婚でムサイ奴かジジイばかり集めてんだから。」
「おま、せめて一度はこっち見ろよ……っつーか、宰相てそんな感じ悪くても務まるモンなのか？」

「んな訳ないだろ。お前ら常連共だけの特別待遇だ。光栄に思え。」

「うっぜえええええ」

何故か得意気に語るジークの野郎に、俺は本音を隠す事なく吐き出す。

周囲の連中がハラハラと成り行きを見守っているが——大丈夫大丈夫。コイツ今、長年アプローチしても微妙にズレた感じでしか報われなかった好きな女と盛り上がって、すげえ機嫌良いから。と、心の中でフォローする。

ずっと入り口に突っ立ってるのも邪魔かと思い、ずかずかとジークの手前まで進む。

そうして、ふと思った疑問に思った事をジークにぶつけた。

「……………なあ、俺どっち要員？まさかジジイとか言わねーよな？」

「両方。」

⌈
⋮
⌋

ひっでえええええ!!……目の前の鬼畜の非人道的な発

言に、俺は思わず美声を執務棟に響かせてしまった。

：あ、ちよっとジークさん。虫螻見る目でこっち見んの止めて。オッサンコレでも結構繊細。

今のは俺が悪…いや、やっぱオメーが悪いわ。

「たく、シャロンにや何だかんだで紳士様（笑）なクセによ。」
「……………」

「いやもう、悪かった許せ辞典の角で狙うの止めれそれマジ痛い！」

「ホホ、宰相殿と紅蓮の狼殿は仲が宜しいですなあ…。」

ふと、ジークの隣に控えていた老人——確か、前宰相サマだったか——が、そう言いながら愉快そうに髭をさする。

あ、因みに紅蓮の狼ってのは俺ン事だ。この近辺じゃちったあ名の知れた傭兵だったりするんだぜ！

……と、いやいや、今はそんな事よか爺さんちよつと待てと言うかなだ。

「「テメエの目は節穴か！」」

「……………いやん。」

「「……………」」

爺さん頬染めまじきもい。

——俺の登場でざわついていた室内が一気に静まり返る。…皆、どうやら気持ちは同じらしい。

「はあ……もう良い。キース、例の物はきちんと持って来たんだろうな。」

何とか持ち直したらしいジークから、今日俺が此処に来た本題の確認をされる。

「おうさ。俺ア、お遣いは得意だぜ。ちゃんと二つとも持って来てんよ。」

と、俺はウエストポーチに突っ込んでいた物を取り出し、ジークの前にぶら下げた。

——シャロンの親父さんが仕入れたと言う、異国の呪詛除けの御守り。

何故、俺がそんなモンを持って宰相サマの執務室に現れたのかという、話は数日前の夜に遡る。

《三日前、酒場・オータムボーンにて》

「「「巫女様が呪詛にかかってるだア？」」「」」
「ああ。」

昼間のド修羅場展開のその後——主に、意気消沈気味だった店主・シャロンの様子が気になって店に来ていた俺達は、店内で何やら深刻そうな話をしている二人に割り込むタイミングを逸し。店の外から健気にもタイミングを見計らって突入した途端、ジークの野郎から一発ずつ拳骨をお見舞いされた。人の恋路の邪魔なんぞ、馬に蹴られてなんぼだぜ！

……で、これだ。

細かい経緯は知らないが、国内どころか下手したら大陸中に広まっている一連の泥沼愛憎劇は、実は巫女様が魔王討伐時にかかった呪詛が原因らしい。

そこで、俺達にも力を貸して欲しいと。

「王宮ン中ってそんなにヤバいのか？」

「ああ。王族連中は全員アウトだし、騎士団もほぼ使い物にならねえ。議会は議会で回りやしねえし、ハッキリ言って最悪だ。」

思ったよりも深刻な状況に、誰一人として酒に酔えない。

「何でもっと早くに気付かなかったんだ？」

一番若いアーノルドが率直な疑問を投げる。確かに、こんな酷い事態になる前に防げた筈だ。

「…誰もが疑う前にやられちまうんだよ。俺は俺で、目の前の問題ばかりに捕らわれすぎていたし。…直接巫女に関わりたくなくて逃げ回っていたのも、悪かった…。」

はあ、と珍しくうなだれるジーク。その頭に、ふわりと氣遣わし気にシャロンの手が乗る。

いつもなら口笛を吹きながらからかう所だが——こんな調子じゃ、そんな気も起きなかった。

「まあ、過ぎちまったモンはしゃーねえし。ジークもあんま抱え込むなや！」

「そーだそーだ、大事なのはこれからどうすつかだろ？」

重い空気を払拭する様に、ギューンとロッジがジークを励ます。

今のジークは確かに宰相と言う職につき、同い年の連中よりも立派に仕事をこなしているかもしれないが、それでも俺達にとっちゃまだまだ餓鬼だ。

しかも俺達はコイツがまだ18の、今以上にクソ餓鬼だった頃から見てきたんだ。…シャロン同様に、実の息子か弟かという位にはこのクソ餓鬼が可愛いと思っている。

——そんなジークが、人一倍高いプライドも捨てて助けを求めてきたんだ。応えてやるのがオトナってもんだろ！

と言う訳で、俺達はジークに協力する事にした。

酒場のシャロン、採鉱員のロッジとアーノルドは城下町でより多くの人から正確な情報を仕入れる情報担当に。

宮大工のギューンと傭兵の俺は王宮に出入り可能なため、それぞれ必要なタイミングで王宮入りし、役目を果たす。

———そうして、決められた役目を果たす為に、俺は今王宮に居るって訳だ。

因みに、ギューンの親父は今日は休みだ。

何せ呪詛除けの御守りは、ジークの分も含めて三つしかないからな。……え？一つ余るじゃないかって？

まあその辺は、今からの俺のお遣いっぷりを見ていてくれって所だな！

「じゃー、俺ア今からサクツとだらしない騎士団の野郎共を鍛え直してくるわ。」

「ああ、頼む。あいつらも良い刺激になるだろう。———そう言えば、今なら魔道騎士エリクも鍛練場に居るかもしれないな。」

「マジでかラッキー。久々にお手並み拝見とすっかな。」

そうして俺は後ろへ向き直し、片手を振りながら退室する。

パタンと閉じられた扉の向こう側で、ジークが凶悪な笑みを浮かべているのが何となく想像出来た。

「さて、鍛練場へ向かうか———。」

そうして俺は、久々の王宮入りと言う事で若干の注目を浴びながら鍛練場を目指した。

ただっ広い王宮を寄り道もせず直進し、鍛練場の入り口まで辿り着いた、その時———。

ドンッ！

「……ってえええ……。」

突然開いた入り口から飛び出してきた男とぶつかった。

「…ッ！すまない、考え事をしていて……。」

そうして、謝ってきたのは他でもない。つい先程ジークから話があったばかりの魔道騎士エリクだった。

…相変わらず全身真っ黒で、如何にも魔道騎士と言った風体してやがる。

「いーっていーって。気にすんな！」

「！……貴方は、紅蓮の…そうか、宰相殿が言っていた講師とは貴方だったんですね。」

「んな大したモンじゃねーって。お前さんはもう稽古済んだのか？」

「はい。…残念ながら、今から別件で移動しなければなりませんので。」

「そりゃ残念だ。また今後手合わせしようぜ——あ、ちょっと待った。」

「はい？」

慌ててその場を離れようとするエリクを、俺は引き止める。

「何か落ちてたぞ。——お前さんのじゃねえ？」

「それは申し訳ない。」

そうして俺は、《落とし物》を差し出されたエリクの手の平に乗せた。

「——！！」

ぶわっとエリクの体から、黒い霧が抜けていく。

「……っ、あ…私は……。」

「はよーッさん、魔道騎士さん——調子はどうだ？」

王宮入りして半刻。

傭兵キースちゃん、お遣いと言う名のファーストミッション早速ク

リア。

……なあジーク、オッサンもなかなか捨てたもんじゃねエだろ？

07話 執務室とジークと俺と（後書き）

まさかのオッサンがチートキャラと言う誰得展開の巻でした。
本当に誰得なんでしょうね（笑）

08話 店と親友と私と（前書き）

今回は比較的大人しめな展開です。多分。

※お気に入り（1745件も…！） ・評価・感想ありがとうございます御座います！

08話 店と親友と私と

昼の営業を終え、休憩モードのオータムボーンにて。

久しぶりに会った親友は、綺麗な長い髪をバツサリと切り——まるで少年の様な格好をしていました。

「男として騎士団に乗り込んだ？」

「イエス！」

「どうしてそうなった。」

カウンター席で自信満々にVサインをかます親友の、その有り余る行動力に私は思わず頭を抱える。…破天荒にも程があります。

「だってエリクの奴、一切事情説明にも来ないんだもん。殴り込みに行きたくなるよね。」

——そう、私がジーク様とそうであった様に、彼女もまた魔道騎士エリク様の婚約者です。…が。

「…そこで私に同意を求めないで下さい。伯爵が泣きますよ。」

「ああ、父上なら大丈夫！ブチ切れてほぼ冷戦中だから。」

「ああああ……」

何という泥沼。

巫女様は巫女様で、あの天然と言う言葉だけでは済まされない世間知らずっぷりはやはり問題ですが——眼前で不敵に微笑む彼女の場合はほぼ確信犯的犯行なので、余計に始末が悪いのです。

そんな彼女——レインは、うなだれる私の様子には気も止めず話を続行する。

「そしたらエリクの奴速攻で気付きやがってね、」

ああ——伯爵様、申し訳御座いません。

彼女の口調が悪いのはもしかすると、もしかしなくとも私の店に通

い詰めた所為です——等と、横道に逸れた事をぼんやりと思いつつ、彼女の言葉に耳を傾ける。

「何て言ったと思う？『貴女のような無鉄砲で後先考えず粗野な振る舞いをする女が居るから、巫女様の様な純真な御方が謂われのない誹謗中傷を受けるのです。』……だってさ！——あ、今のモノマネ結構似てなかった？」

「似てません。」
ピシヤリと。

昔はどうあれ、今の彼女と私は貴族と平民。

本来であれば到底認められる態度ではありませんでしたが——昔から変わらず、許されたままの親友と言うポジションに甘んじて、私は嘘偽りない心を伝えたと。

だよねえ、とレインは何故か嬉しそうにふにやりと笑いました。

「……ですが、あの温和そうなエリク様がその様に辛辣な言葉を吐くとは意外ですね。」

一瞬、和やかな雰囲気の流れそうになりましたが、ひとまず話を本題に戻します。

今日彼女と会ったのは、雑談だけが目的ではありませんでした。

「いや、エリクはあれで結構腹黒いし、嫌いで無能な奴はバツサリ切るタイプの男だよ。——まあ、本命にはベタ甘つてのは初めて知ったけど。キャラクター崩壊すぎて爆笑すんの抑えるのキツかったわ……。」

そう言って、ケタケタと笑う親友を私はじっと見つめる。

「……レイン、」

「……うん。呪詛の所為だ、ってその後君の旦那から聞いたけど、やっぱりキツかった。でも今回の件がなくても、いずれはきつとこうなってたと思う。」

それまでの——正直伯爵令嬢としてはどうかと思うぶっ飛んだテン

シヨンから一転。

本来の彼女から漏れた言葉は、紛れもない本音でした。

：あ、因みに彼女の旦那云々の件については毎度の事なので、もう流す事になっています。はい。

此方の都合も勿論ありましたが――つい先日まで、似た様な事を考えていた私としては、何とか彼女の力になりたい。

：私は改めて背筋をピンと伸ばす。

そして、目の前のレインを真っ直ぐ見つめ直してから、話を切り出しました。

「レイン、協力してもらいたい事があります。」

「うん。私もそのつもりで来た。：いや、“私達も”と言った方が正しいかもしれないけれど。」

「？」

此方の話を想定していたかの様な彼女の反応に、一瞬傾げる。

そんな私の手前のカウンターに、一冊の冊子――一見する限りでは、何の変哲のない日記帳だ――が差し出された。

「……これ。私達――まあ所謂、今回の呪詛にしてやられたご令嬢達の情報網から仕入れてきた王宮の内情とか、そんなの。」

「……。」

私はその冊子を取り、パラパラとページを捲る。

交換日記形式で綴られたそれは、確かに彼女の言う通り、巫女様の行動パターンや呪詛にあてられた者のリスト、その他にも――女性視点だからこそ見えてくる情報ばかりが記載されていました。

「……流石です。仕事が早い。」

「みんなノリだけは良いからね。：シャロンの事も気にしてたよ。」

「――」

いくら我が国が陽気でフランクな国とは言え、没落した家の人間を未だに気にかけてくれる方がジーク様やレイン、伯爵様以外にもいらっしゃる事に私は軽く驚きました。

それと同時に――まるで自分の事の様に嬉しそうに報告してくれるレインに、心が温かくなるのを感じて。

ふと思うのでした。

国の贄となるべくして喚ばれた巫女様は、今のこの状況で果たして本当に幸せなのかと。

「……………」

「シャロン？」

考え込む私を怪訝そうに窺うレイン。

「…あ、すみません。何だか、嬉しくてつい惚けてしまっていました。」

「あはは、変なの。」

思った事をありのまま彼女に話す訳にもいかず、とっさに私は誤魔化していました。

「さて、私はそろそろ王宮に戻るよ。」

「…………まさか、騎士団にまた…。」

「まあね。…やっぱりさ、私は自分の目で直接確かめたいんだ。――大丈夫！前にダインの小父様から頂いた御守りも持ってるし。…ね。」

「……………」

はあ、と私は溜め息を一つ吐く。

この破天荒な親友の願いには、昔から私も弱いのです。

「……無茶だけはしないで下さいね。」

「りょーかい！」

せめてものの要望を伝え、元気に想い人のいる王宮へと駆け出す親友を見送る。

——と、そこに入れ違いで一人の女性が店に入ってきました。

「レイン嬢は相変わらず元気だねえ。」

「エレノアさん。」

赤毛を後ろで一つに束ねた壮年の女性は、まるで事情を全て把握しているかの様に——いや、実際把握しているのであろう。

ともかく、行く末を見つめる様な、それでいて優しい眼差しで彼女はレインが去っていった方向を見つめていました。

「——すみません、ロッジさんとアーノルドさんはまだ来てないんです。少し待っていて貰えますか？」

そうして、コップに入れたレモン水を差し出す。

「ああ、ありがとう。いつもの紅茶酒も貰えるかい？…あと、レイン嬢が置いていった“日記帳”も。——今日はあんた達としか予定はないから、あたしゃ全然問題ないよ。」

「承りました。…やはりお見通しですね。——今日は此方からのお誘いなので、サービスします。」

言いながら、私はエレノアさんへ“日記帳”を渡した。

「ありがとうございます。…まあ、情報屋ってのはそんなもんだからねえ。」

——ああ、よく見てんじゃないか、ご令嬢様方も。」

上機嫌にページを捲っていく彼女が、徐々に真剣な顔付きに変わる様子を見やりながら、今夜はきつと長くなる——私はそう、感じました。

08話 店と親友と私と（後書き）

普段のエリクさんとレインさんはお互い反発しつつも嫌いになれないとか、そんな感じなんでしょうね。（目茶苦茶他人事だな！）

なかなかサクサク進まずやきもきしますが、何とか乗り切りたいと思います。

09話 この件はどうぞ内密に（前書き）

ラスボス様降格のお知らせ。

※お気に入り2058件、評価、感想ありがとうございます！

09話 この件はどうぞ内密に

巫女様の行動パターンは、ほぼ同じ内容を毎日繰り返していると言っても過言ではない。

朝、らじお体操と言う謎の運動を数分した後、王宮中を散策。

昼時までの半端な時間は特定の誰か——主に男性。この所は宰相・ジークフリートの可能性が極めて高い——を訪ね、過ごす。

昼時、王宮食堂（最近はやたら王族の出没率が高い。）で食事。たまに手料理を振る舞う事もある。

午後、特定のd（以下略）

数日に一度何かしらのしょもない事件が発生する。

夜、バルコニーで特定の誰か——日中帯とは異なり、何故かジークフリートの目撃情報はないが——と会話後、就寝。

そんな巫女様の生活サイクルが崩れる事はなかった、らしい。
の、ですが——。

「……………巫女が呪詛に……って、何を皆さん……言ってるんですか……？」
「—————！」

月光が窓から差し込む《酒場・オートムボーン》。

いつもであれば大いに賑わっている筈のその場所に衝撃が走りまわした。

「…オイオイ、まさかのご本人様登場かよ。」

一気に静まり返った店内に響いた呟きはキースさんのもの。

「……っ。」

そんなキースさんの一言に、目の前の、異界の衣服を纏った少女がピクリと反応する。

——そう。現在店の入り口にいらっしゃるのは、紛れもなくつい先程まで私達の会話で取り上げられていた巫女様ご本人。ちらりと周りを確認しましたが、どうやら護衛も付けずお一人でやって来られたみたいでした。

「……………何てこったい。」

拝啓、ジークフリート様。

まさかのイレギュラー、ラスボス様が舞い込んでまいりました——。

＊ ＊ ＊

ひとまず入り口に立たせっぱなしも辛いだろうと言う事で、巫女様を私達が使用していたテーブル席の隣の席へ案内し。

まず初めに口を開いたのは、情報屋のエレノアさんでした。

「巫女の嬢ちゃんがこんな夜遅くに一人歩きかい？世間知らずとは聞いてたが、此処まで非常識とはねえ。」

「…………エレノアさん。」

お客様に直球すぎる言葉ダメ、絶対。

上級者向け毒舌家なエレノアさんの一言で、巫女様若干半泣き状態に陥ってしまったじゃないですか。…と、視線で抗議しますが、マイペースな常連さんに反省の色は見えません。

「ああ、すまないね。大抵の客はこれで悦ぶんだけどねえ。」

「ただだけドMなんだよお前ンとこの客…………。」

相変わらず、情報屋にはお色気全開なエレノアさんにドン引きしているのは、昔馴染みらしいアーノルドさん。

…………非常事態と言うのにこの余裕っぷり。私はある意味感動してしまいました。

「にしても、シュールだよなあ……この図。」

そう呟いたのはロッジさん。

その言葉の内容通り、今この場に居る巫女様以外のメンバー……エレノアさん、ロッジさん、アーノルドさん、そして何故か居るキースさん……私は、全員でテーブル席の中央にある呪詛除けの御守りを全員で触れていると言う、何とも言い難い姿勢で巫女様と対峙していました。

あ、因みに実働班のキースさんには本日召集はかかっていませんでしたが……何でも昼間、王宮にてジーク様をからかい過ぎて追い出されてしまったらしく。

『ジークの奴に捨てられた！アイツ俺より若い男に走りやがって……ッ！』……などと、つい最近似た様な事を考えていた私にしてみれば少々複雑な台詞と共に、オータムボーンへ駆け込まれて来ました。……まあ、此方には御守りのストックがなかったので、結果オーライなのですが。

「……で、何でこんな夜遅くに巫女様みたいなお嬢ちゃんが城下町の、しかも酒場に来る事になってんだ？」

エレノアさんに負けず劣らず直球なアーノルドさんの質問に、巫女様が一瞬ビクリと怯えました。

……どうやら用心のために店内の灯りをランプのみにしてしまっていた事が、三十路後半のガタイのよすぎる男性にいつも以上の迫力を与えてしまったみたいです。

すみません、巫女様。王宮の様に繊細な見た目の方は男性陣にはいらつしゃいませんが、暫く我慢して下さい……と、また脱線してしまいましたね。

兎にも角にも、何故巫女様がお一人でわざわざオータムボーンに？

……その答えは、何とも乙女チックな内容でした。

「：あ、お昼時もなんですけど、毎晩ジークさんよく姿を消されているみたいなので、気になっていて。ひよっとしたら、此処に来ているのかな……って。」

ああ、成る程。やっぱりな——その場に居る全員が、予想通りの回答に納得します。

先日の昼間もそうでしたが、現在巫女様の頭の中はジーク様でいっぱいのです。

「宰相様は此処にや来てないよ。：にしても、巫女様はあんなヘタレ野郎のどこが良いんだい？」

そう言ったのはエレノアさん。ちなみに、あのジーク様をヘタレと呼んで今まで無事だったのは、この城下町で彼女位です。

「えっ：ヘタレ……？……貴女はジークさんと親しくされているんですか？」

「今、質問しているのはあたしだよ。」

エレノアさんのジーク様に対する評価に若干驚きつつも関係を気にされる巫女様を、バツサリ一刀両断するエレノアさん。：あああ、巫女様また半泣きに。エレノアさん、一回り以上年下相手に容赦なさ過ぎです。

「あー、そうだな。俺もちょい気になってた。嬢ちゃん、アンタ何でそんなにジークに固執してんだ？」

一瞬のうちにギスギス感が増した空気を和らげる様に、気の抜けた調子でキースさんが聞き直す。

珍しく空気を読んだキースさんの対応のお陰か、巫女様は何とか持ち直した様でポツリポツリと話始めました。

「私、これまでずっと不安だったんです。：この世界に来てから、ずっと皆さんには良くして貰っていたんですけど、どこか空々しく感じてしまってた。——でも、ジークさんは違ったんです。何と云うか、最初から私自身を見てくれているというか。：それが、嬉し

かったんです。」

「……………」

——「巫女とは、国の贅となるべくして呼ばれた存在。」

昼間の、レインとの会話の後から何度も頭の中でリフレインしている言葉がまた浮かび上がりました。

：巫女様は、どうやら本能的に周囲の方々の態度に違和感を感じ取っていた様です。

恐らく多くの殿方との噂が立ってしまっていたのも、そう。無意識の内に、呪詛に囚われていない誰かに助けを求めていたのでしょう。そして呪詛除けの御守りを所持するジーク様の、呪詛に惑わされないありのままの態度に気付き、安堵して——惹かれた。

「……………」

でも、少し待って下さい。

「なあ、それって別にジークじゃなくても良かったんじゃない？」

「え？」

予想外の切り返しだったのか、巫女様が動揺する。

「要は——呪詛にあてられない奴だったら、誰でも良かったって……事だろ？」

それを気にせず、まるで私の考えを代弁するかの様に切り出したのは本日最年長のロッジさん。

そう。今の巫女様の話を聞いて感じた違和感。

彼女の話の中には——“ジーク様自身”についての言及が一切ありませんでした。

「そんな……でも、だって。」

それでも尚、納得いかず食い下がろうとする彼女にロッジさんが言葉続ける。

「じゃあ、物は試した。ジークの良いところ何でも良いから挙げてみな。」

「えっ……。……。……ジークさんは、他の皆さんと違って私をきちん

と叱ってくれます。」

「それだけなら今日の前にいる俺等だって出来るぜ。実際もうしてるしな。——って言うかだな、嬢ちゃんも本当は気付いてるんだろ？ 何しても叱りもしねエ“他の皆さん”のが異常なんだって。」

「———。」

ロッジさんに対する反論が出てこないのか、巫女様はぐっ、っと自身のスカートを掴む。

…流石に、短時間で追い詰め過ぎた気がします。

「——巫女様、先程“呪詛とは何か”とお聞きになりましたね。」
「えっ、…あ、はい。」

突然口を開いた私に、俯いていた巫女様の顔がパツと上がる。
私は努めて——自分の言葉が彼女の中へ届く様に、声のトーンを柔らかくしながら。

「これからお話しする内容は、私達も——ジーク様も、本来巫女様へは知らせるつもりはなかった内容です。…ですが、本当に貴女の事を思うのならば、お伝えした方が良いと判断しました。」

「……………」

真剣に、ありったけの誠実さを持って、彼女を見つめる。

そんな私の想定外の動きを、常連の皆さんは止める事無く静かに見守る。

そして、眼前の彼女が澄んだ瞳を真っ直ぐ此方に向けてくれている事を確認し、私は言葉を続ける。

「この情報如何でこの国の将来が決まるといっても過言ではありません。巫女様——いいえ、マドカ様。この件はどうぞご内密に——。」

そうして私は、彼女に今この国で起きている事、そして今後起きると思われる事をありのまま伝えたのでした。

09話 この件はどうぞ内密に（後書き）

モヤモヤした展開が続いてすみません。
早くギューンさんに会いたいです。

10話 隠し事はいずれバレます（前書き）

エレノアさん無双。

※お気に入り2143件、評価、感想恐縮です…！

10話 隠し事はいずれバレます

「——この国を狙っている国の誰かが、私に呪詛をかけた？」

「はい。」

それが、レインから貰った“日記帳”とエレノアさんの情報、そしてロッジさんとアーノルドさんが入手した情報から導き出された結論でした。

「勿論まだ仮説段階の部分もあるので、絶対ではありません。ですが、それでも情報は信頼性の高いものばかりなので可能性は非常に高いです。」

「……………」

まだ信じられない、と言った感じの彼女に、私は一つ一つ持っている情報を説明していく事にしました。

——まずは巫女・マドカ様の呪詛について。

“日記帳”には、呪詛はその年齢や性別によってそれぞれ効力が異なると記されていました。

同年代の男性であれば、まるで熱に浮かされた様に甘ったるい恋人の様に、同年代の女性であれば盲目的に彼女を盛り立てる親友の様に。

既婚者や壮年以上の男性および女性であれば、兄弟や親戚、娘の様に溺愛する様になるとの事。

症状が出だすタイミングは、彼女と接した直後から。共に過ごした時間に比例して、症状は顕著になっていく様で。

そして、どのパターンも総じて言えるのは、ジーク様が言うところの“色ボケして使い物にならない”状態に陥りやすいと言う事でした。

「…心当たりは、ありませんか？」

「……あ、ります。」

戸惑いながらも肯定するマドカ様。スカートを掴む力が、少しだけ強くなりました。

「あー。そういや今日、ジークの執務室行ったらやたらムサイ奴や爺さんばっかだったな。」

と、口を挟んだのは本日王宮へ“お遣い”に行ってきたキースさん。
「ジークもその辺は気付いてたんだろうさ。若い奴の方が症状が深刻みたいだし、面倒を避けたかったんじゃないか？」

「かもなー。何かそれっぽい事言ってたわ。」

「……………」

エレノアさんの言葉に納得するキースさん。

マドカ様も心当たりがあるのか、表情が暗くなります。

「おい、嬢ちゃん大丈夫か？」

「…あ、はい。大丈夫です。続けて下さい。」

アーノルドさんの問いかけに何とか持ち直した彼女は、彼にそう答えながら再び俯いていた顔を上げました。

……それでは話を再開しましょうか。

——次は巫女の呪詛にあてられたと思われる人物に関する噂について。

こちらは“日記帳”とエレノアさんの情報で分かった事ですが…これが思いの外、噂が流れるスピードが早く。

エレノアさん曰く、殆どの場合が当日もしくは翌日には国外まで伝播している事もあり、誰かが意図的に流していると考えて間違いないとの事でした。

「ふざけた内容は兎も角、単なる噂好きな人間が流したにしちゃ正確な情報が広範囲に流れてるからね。…あたしゃ情報屋だ。出所は流石に店主達にも言えないが、何かしらのルートがあるのは確実だよ。」

「：情報屋さん、ですか。」

意外そうにエレノアさんを見つめるマドカ様。：そう言えば、自己紹介していませんでしたね。

「ああ、新たな世界の扉を開く情報屋・エレノアとはあたしの事さ。何か知りたい情報があればいつでもどうぞ。勿論、金を取るけどね。」

「ちゃっかり営業してんじゃねーよ。」

「はいはい、エレノアさん、アーノルドさん。マドカ様が戸惑ってます——話、進めますよ。」

私はマイペースな常連さんへのツツコミを放棄し、サクサク話を進める事にしました。

——三つ目は、採鉱員ペアが現場のお仲間さんから入手した北の採鉱場での目撃情報について。

巫女一行が魔王討伐から戻って来た前後から、度々怪しい人影が目撃されているとの事。

複数ある目撃者達の証言をまとめたところ、動向および人数、身体的特徴がほぼ一致しており——これはまだ、推測の域を出ていませんが、採鉱場付近で定期的に何らかの取り引き、もしくは報告等をしているのではないかと考えられます。

——そして四つ目は、エレノアさんが入手した諸外国の近況について。

どうやら、数ヶ月前から北方にある同盟国・フローディアにて武装強化等の不穏な動きがあるとの事。

……………そこまで話した時、マドカ様が何か思い出したかの様に、ポツリと呟きました。

「…そう言えば、魔王が潜伏していた城はフローディアとの国境付近にありました。まさか——。」

「今回の黒幕は間違いなくフローディアだろうな。」
「—————！」

ふと、此処にいらっしやる筈のない御方の声が真後ろから降りてきました。

「……………まさか。」

振り返れば、其処には——何故か我らが愛しの宰相様が。

…入り口のベルが鳴らなかったと言う事は、いつかお渡しした合鍵で裏口から店に入ったのでしょうか。

「……………ジーク様…。」

つい先日、暫くは店に来れないと言っていた筈なのに、どうして此方に——。

「おお、ジーク！ジークじゃないか！やっぱり若い餓鬼より味のあ
る大人…。」

「うるせえ黙れ。」

テンションMAXで出迎えるキースさんの、その言葉が終わるのを
待つことなくジーク様の地を這う様な声が店内に響きました。

「え、ジークさん…？」

オンオフの切り替えが凄まじい宰相様の、その劇的な豹変ぶりに付
いていけないらしいマドカ様が一人戸惑っています。

ですが、すみません。今は私もフォローする余裕を失っています。

「で、これは一体どう言う状況なんだ？シャロン。」

そうしてジーク様は私の肩に手を置き、それはもう素敵に凶悪な笑
みを下さいました。目は全く笑っちゃいませんが。

「……………ええと。」

心なしか、ジーク様の背後から地鳴りまで聞こえてくる様な錯覚に
陥ってしまいます。

「俺、本当は“魔王”って呼び名はアイツの為にある気がする…。」

「奇遇だな、俺もだ。」

アーノルドさん、ロッジさん。お二人共、頼みますから傍観決め込まないで助けて下さい。

「説明してくれよ、なあ？」

「……………はい。」

嗚呼、せめて一晩は心の準備がしたかった———そう思いながら、私はこれまでの経緯をジーク様に全てお話したのでした。

＊ ＊ ＊

「この馬鹿。」

全てを聞き終わったジーク様から、見事なチョップと直球なお言葉を
をお見舞いされました。

「その巫女様に情報流すとか、本当何勝手にリスク高いことやってくれてんだよ。どんだけこっちが毒キノコ食べたかの様な訳分からん謎のテンションに巻き込まれるのに耐えたり、水面下で調整したか知ってるだろ、この馬鹿シャロン。」

「……………申し訳御座いません。」

此方も勿論、その辺は承知の上での行動でしたが。

それでもジーク様の言い分は十分分かると言いますか…正論なので、
ぐうの音も出ません。

そんな私とジーク様のやり取りに止めに入ったのは、黙って静観している常連の皆さんではなくマドカ様でした。

「ジークさん止めて下さい！私は、今日この話を聞けて良かった
と思っています。——自分の置かれている状況も、十分理解しました。」

真っ直ぐにジーク様へ訴えかけるマドカ様の様子に、ジーク様は一瞬だけ見開いて…でもすぐにいつもの無愛想顔に戻しながら再び此

方に向き直りました。

「…ふん。まあ、確かに思ったよりは脳みそも根性もあるみたいだな。——だがな、シャロン。お前は彼女に嘘が付けると思うか？ 事実を知った今、このちんちくりん娘が何も知らぬそぶりを王宮全員相手に貫き通せると本当に思っているのか？」

彼女ならば大丈夫です——出来れば、彼女を信じてそう言い切りたい。ですが、そう言い切れる程には、私はまだ彼女を知らない。

「……………」

今度こそ沈黙してしまった私に、ジーク様が深いため息をつかれました。

「ちんちくりん坊ちゃんに言われてもなあ。」

と、そこに口を挟んできのはいつもの通りキースさんでした。

「黙れ外野。と言うか大の大人がそんなだけ揃っておいて、何で誰もシャロンが暴走すんの止めなかったんだよ。脳まで筋肉なのか？」

「やだこの子マジギレしてる怖い。」

ピリピリとイラつきモード全開なジーク様と、相変わらずな調子のキースさん。二人の落差が凄い事になっています。

そんな二人の様子に一瞬ポカンと置いてきぼりになっている内に、今度はエレノアさんが口を開きました。

「後から来というキャンキャン煩い坊ちゃんだねえ。これだから器の小さい男は嫌いだよ。」

「な。」

「大体ねえ、アンタいつもならこの位のイレギュラーでここまで取り乱さないだろ。何だかんだ言って店主に関わって欲しく無いだけじゃないか。」

「店主さんに関わって欲しくない…ってどういう事ですか？」

相手が宰相様だろうが遠慮なく発言するエレノアさん。そんな彼女に、マドカ様が何故か片手を挙げながら質問されました。

「ああ、こいつら婚約者同士——と、今は一時的に白紙にしてるんだっけか？まあ、そう言う間柄だからねえ。」

「えっ、そうだったんですか！？」

「エレノア！」

それまでよりも強い調子で責めるジーク様。

マドカ様はやっぱ涙目になってしまいましたが、流石に付き合いの長いエレノアさんはこの程度では怯まない——どころか、余裕のないジーク様を見て嘲る様に笑いながら、どこか愉しげに言葉を続ける。

「ほらすぐ噛み付く。宰相殿はよほど渦中の巫女様と店主を会わせたくなかったんだ。店主もこの何年かで世間知らずっぷりはいくらか無くなってきたけど、何だかんだで甘ちゃんのお人よしだからね——現に、店主はもうこの嬢ちゃん自身のことが見過ごせなくなってるだろう？」

「え、まあ、はい。：そうですね。」

突然エレノアさんから話を振られて。

一瞬戸惑いながら私が素直にそう答えると、ジーク様が苦虫を噛み潰したかの様な表情で再び大きなため息をつかれました。

「ジーク、あんたさっき言ったね——何故店主を止めなかったのか、って。何勘違いしてるのか知らないが、あたしらは王宮の連中とは違う。別にあんたの駒じゃない。ただの協力者だ。」

尚もエレノアさんの話は続きます。エレノア容赦ねえな、と誰かの呟きが聞こえました。

「あたし達はあたし達が最善と思った事をしているだけだよ。店主が巫女の嬢ちゃんに情報を伝えようとした事も、これからを考えて必要だと思ったから止めなかった。：人間、何も知らないまま・傍観したまま過ごすよりも少しは痛い目見とかないと、本当の意味で幸せになんてなれやしないんだよ——店主も、この嬢ちゃんもね。」

「すげえ、エレノアがまともな事言ってやがる。」

「お黙り。あたしやいつでも真面目に全力投球だろうが。」
感心するアーノルドさんをエレノアさんが睨む。

それに対してアーノルドさんが「おー、こわ。」と御守りに触れていない方の片手で降参ポーズを取ると、今度はそれを見てエレノアさんが「あんたが余計な一言挟むからだろ。」と呆れる。

そんな二人のやり取りに、ほんの少しだけ張り詰めていた場の空気が和らいで。

そして。

「ジーク様。」

私は意を決して、黙り込んでしまったジーク様に声をかけました。

「ジーク様、勝手な事をしてしまったのは本当に申し訳ありませんでした。ですが、彼女に事実を伝えた事自体は後悔していません。

：真実を知らないまま過ごすのは、それを突きつけられた時よりも遥かに不幸です。」

「：シャロン。」

そう。私は以前、母を失ってから父の苦しみに関気付く事が出来なかった。

そして父の借金により家が没落した際には、その事実よりも何も知らずに過ごしてしまっていた自分の愚かさに絶望した。

——そんな私の過去を、目の前のこの人は知っている。

「彼女に事実を伝えたのは私です。その事に関する責任も自覚しています。——これが単なる私の我儘である事も、最悪の場合、皆さんに甚大な影響を及ぼしかけないと言う事も、理解しているつもりです。」

目の前のこの人は自分勝手に独善的な行動が大嫌いだ。

今回の件で見放されてしまう可能性は十分にある。それを考えると体の震えが止まらない。

でも、この件だけではどうしても譲れなかった。

私は真後ろのカウンター席に座るジーク様を見上げる。そして——。

「それでも——お願いします！私と、そして彼女を信じて下さ……。」「ガン！」

頭を下げた瞬間、全力で自分が座っていた椅子の背凭れで頭を打ちました。

「…は？おい——シャロン！」

「あっ、ちょ…オイ、まさかこのタイミングでそんなボケかますか！？」

…などと言う皆さんの声を聞きながら、私は意識を手放したのでした——。

10話 隠し事はいずれバレます（後書き）

精神的なものから始まり物理的に強制終了したフルボツコタイム。
メイン二人はもうちょつと苛めた方が良かった気もしますが、まあ、
機会があればと言う事で…！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0229y/>

ねとられ婚約者

2011年11月9日11時56分発行